

Title	書評：三尾裕子編『台湾で日本人を祀る： 鬼から神への現代人類学』慶應義塾大学出版会、2022年
Sub Title	
Author	鈴木, 正崇(Suzuki, Masataka)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2023
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.28 (2023. 7) ,p.111- 115
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20230701-0111

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評：

三尾裕子編『台湾で日本人を祀る——鬼（クイ）から神（シン）への現代人類学』

慶應義塾大学出版会、2022年

鈴木 正崇

台湾に関する文化人類学の研究は、質量ともに膨大である。その中において本書は、「日本神」という新たな概念によって従来の研究では見落とされていた現象を考察の対象に浮上させた。研究の目的は「なぜ台湾の人々が、このように異民族、しかもかつての植民地支配者をわざわざ神として祀るのか」（まえがきX頁）という疑問に答えることである。そして、性急に戦前の日本への賛美や親日と結論付けるのではなく、靈魂を祀り信じるという信仰や文化の在り方や、日本支配、日本由来の観念やモノが持つ現在の意味を掘り下げることが重視される。併せて台湾の在来の信仰との関係も検討された。構成は以下の通りである。

序章 「台湾の民間信仰と日本神」（三尾裕子）

第1部 メディアと観光の中の日本神

第1章 「英霊と好兄弟のあいだ——メディア言説、現地の実践、新たなコミュニケーション」（藤野陽平）

第2章 「台湾の日本神をめぐる信仰と観光——高雄の保安宮における歴史の選択と新たな展開」（原英子）

第2部 民衆の記憶と日本神

第3章 「田中綱常から田中将軍への人神変質——民族・国家の境界を超える民衆史学」（林美蓉・三尾祐子・劉智豪）

第4章 「植民地経験、戦争体験を「飼いなす」——植民地・戦争体験の記憶の媒体としての日本人の靈魂」（三尾裕子）

第3部 台湾の在来宗教信仰と日本神

第5章 「廟神の出自により儀礼に差異は見られるか——台湾の日本神を祀る廟と中華神を祀る廟における儀礼・祭祀の比較」（山田明広）

第6章 「台南市内における日本人の神々——主に航空事故に起因する事例から」（陳梅郷）

第7章 「漂流物が神となる——日本神の外来性解析」（林美蓉）

補章 「日本神信仰と出会う——民族誌映画撮影の経験と視点」（遠藤協）

序章は総論にあたる。事例として、台北近郊の新竹市の聖軍堂で祀られている「三聖軍」「聖軍爺」を提示する。戦前、この付近では日本人と現地住民は平和裏に共存していたが、1943年11月か1945年に軍用飛行場が米軍の空襲で大損害を被って多数の日本兵が亡くなった。その後、牛や鶏が脱走し

でも、旧兵營付近で占いをすると探し出せるとか、夜毎に犬が現れるという怪奇現象が起こり、童叢に伺いを立てて聞いてみると、爆死した日本兵が憑依したのだという。神像を作って祀ってほしいという託宣も下った。そこで住民は日本兵を祀ることにして神像を作って、1978年に「聖軍堂」の廟が完成した。元々は石が祀られていた所だという。童叢はその後も神の意志を伝え、ご利益が得られるようになった。戒嚴令下の1970年代後半に、旧日本軍の軍服を着た神像は、国家保安局に没収されたが、その後に復活して現在に至る。

聖軍堂の事例のように、日本人に由来する靈魂が台湾で祀られている場所は、2021年8月の時点で、36種の神、49ヶ所の廟にのぼるといふ。これを「日本神」と名付ける。その定義は以下の通りである。①日本を出自とする神という伝承があり、明治維新後に台湾に渡り、多くが台湾や近海で没した人の靈魂・遺骨・関連するモノを祀る。但し、実在者か否かは問われないことが多い。②祠廟や民宅で奉祀され、神像や神位を持つ。③顕靈して何らかの靈威を顕し、奉祀されると現世利益の願いに応えるようになる。特に③が重要で、①②を考慮して「日本神」の範疇に含めて、その特徴と考える(6頁)。

調査した36種の「日本神」の外形上の特徴が列挙されている(9~11頁)。それによると、①男性神が多い。②生前の職業は大部分が軍人である。③廟の所在地は、台湾本島の西側南部が多い。④死因は他殺が多く、戦死や戦争関連死で、自殺者も含め不自然死である。⑤神名はあっても人間の名は不明が多い。⑥人名があっても、実在者であったり遺族がいたりする例は少ない。⑦祭祀の契機は靈魂自身からの人々への働きかけによる。⑧廟は小規模で廟門がないことが多い。⑨神位や神像が作られ廟が建てられる過程で靈験を顕していく。⑩神としての認定には高位の神の下での修行で神格が高まるか、大きな廟の神の下で部下と位置付けられる場合が多く、主神になったのは一例(東龍宮)のみである。

次に先行研究を検討して「日本神」を台湾漢人の民間信仰体系との関連で位置付ける。台湾では靈的存在は神・鬼・祖先の三種であり、相互に境界を跨いで転換・変容する。人が神になる過程は大きく「陽神」と「陰神」に二分化される。生前に位が高く世の中に功績があった人が神になるのが「陽神」、異常死によりこの世に恨みを抱いた靈魂が鬼として祟りを及ぼすが、祭祀を重ねて靈験を顕すのが「陰神」で、各々陽廟と陰廟で祀られる。「日本神」は、日本軍人の神格化(偉人)、日本警察官の神格化(不自然な死を上回る生前の業績)、日本軍人の神格化(祟りから靈験へ)の三つに類型化でき、大半が鬼から正神に向かいつつある「陰神」で、一部には賭博の神も含むという。台湾の民間信仰では有応公と類似する。「日本神」は台湾の民間信仰の枠組みに取り込まれて生成されたことが明らかになる。

第1章は、台南郊外に祀られる飛虎將軍の廟について論じる。米軍機への体当たりを試みた日本の戦闘機(飛虎)の飛行士が、村に墜落しそうになったのを避けるために、敢えてパラシュート脱出をせずに墜落して死んだという物語に基づき、死後に飛虎將軍という神に祀られたという。司馬遼太郎や小林よしのりなどの日本側の紹介に、台湾のメディア言説、現地の人々の変化する伝承が混淆錯綜するが、メディアやネットを通じてステレオタイプ化されていく。「君が代」や「海行かば」を歌う参拝が注目され、日本人観光客も訪れるようになり、2015年には日本式の神輿も登場した。「日本神」は「台湾化」した人神である。

第2章は、高雄の保安堂の事例を検討する。1923年に漁師が海で人間の大腿骨の骨を拾って祀ったことに始まり、1946年に海から上がった頭蓋骨が祀られて陰廟の様相が変化し、度重なる夢告によって祠が拡張されていった。1990年が大きな転機で、童乩の託宣で、頭蓋骨は日本人で38の数字を持つ日本の軍艦の艦長と確定された。地元の人が同年に沖縄護国神社を訪問して発見した史実が結びつけられる。保安堂には次第に日本風の様式が加味され、鳥居の絵や絵馬の奉納が行われ、日本式神輿が安置され、神像も日本の海軍軍人像に変化した。インターネットを介して伝説と史実の照合が始まり、廟の神は第38哨戒艇の艇長と同定された。ガイドブックでも紹介され、日本からの観光客が増大した。保安堂は、台湾人による日本文化享受の場、愛好家のコスプレのお披露目の場となり、ネット活用による国境や地域を超えた活動や交流が活発化した。情報化社会での宗教とインターネットとの関わりを論じる「ハイパー宗教」(井上順孝)の概念を援用しつつ考察を進めている。

第3章は、田中綱常という実在の人物の事例である。田中は、台湾で起こった牡丹社事件(日本軍による台湾出兵事件。1871年)の討伐に当たって派遣され、清国との交渉にあたった人物で、台湾併合後は台北県知事に任命されるなど高級植民地行政官として活躍したが1903年に屏東県枋寮で亡くなった。田中の台湾での生活は実質1、2年と短い間であったが、死後82年経った1985年に屏東の女性の乩童に憑依して靈威を顕し、神として祀られるようになった。枋寮では1996年から廟の建造が始まり1998年に東龍宮として完成した。高級植民地官僚の業績を根拠に、当初から台湾人が奉祝する「陽神」となり廟の主神の田中將軍として祀られたのである。廟を建築していく過程で沢山の奇蹟が起こったという。その間に田中に関する史料の蒐集が行われ、文字通り神として歴史化されて祀られた。

第4章は、屏東県東湊鎮に鎮座する靈聖堂を取り上げて地域社会との関係を考えていく。廟の主尊格は地藏菩薩だが、日本軍人の神像が併祀され実在者か否かは不明だという。廟の土地は元々は戦時中の日本人の火葬場であった。火葬は、漢人には忌避される葬法であったが、当時の統治者には逆らえなかった。戦後、跡地は不浄な場所とされ放置されていたが、近くの地母娘娘廟で誦経団を組織していた陳氏の夢枕に日本人の軍人が現れ、米軍に撃沈された駆逐艦の300人が遭難し死体が火葬された由来を語り「安定」を求めた。火葬場では怪異現象が度々起こり、陳氏は香炉を置いて拝み始め、神像を作り2005年には廟が建てられた。不吉で不浄な場所が、靈驗あらたかな聖地へと転換した。ただし、最大の祭りは神の「生日」(生誕祭)ではなく死者供養の「普度」(施餓鬼)で、死者の記憶は残り続けた。戦争の記憶に結びつく不吉な場所が、台湾人が統御できる空間に変容していく過程を追う。

第5章は、屏東県の東龍宮で行われた「日本神」田中將軍を祀る道教儀礼の実践の考察である。事例は普度法会と祝壽法会であるが、東龍宮の主神の田中將軍は日本人であるとしても、特に日本的な儀礼は行わず、「日本神」の廟と中華廟で行う儀礼は基本的には変わらないという。童乩が時々日本語を使うだけで、「問神(神様への伺い)」の内容は、他の中華神と同じで、台南の飛虎將軍の廟とも大きな違いはない。「日本神」のゆえに日本式神輿を使用するが、導入の時期は2011年の東日本大震災以降で、台湾から日本へ送られた義捐金によって相互交流が活発化し、日本からの観光客が増加したことが契機である。台湾人は、廟神が日本人であるか否かを問わず、利益・恩恵を齎せば信仰し祭祀するという事例である。

第6章は、台南市内の複数の廟の事例を比較し、航空機事件などで死亡した日本人の亡霊について、1945年以後の事例を、文献・聞き書き・観察・まとめ（廟の全体像）と項目を設けて比較検討した。共通点が多く、墜落死した日本人航空士の死亡した現場や日本の軍人が死亡した場所の近くで、死後しばらくして祟りが起こり、地元住民が恐れて小さな廟を作って祀る事例が多く、祟りの原因は童乩などを通じて明らかにされる。飛虎將軍の廟はその典型である。興味深いのは1980年代に流行った「大家楽」という賭け事が「日本神」の興隆と連関していることである。廟には賭博が流行した時に当選の数字を聞く占いのため多くの信者が集まった。賭博が下火となり寂れた廟も増えたという。時代の状況と大衆文化が連動して流動的に変化する「日本神」は、継続的な調査が必要とされることが示唆される。

第7章は、台湾の民間信仰の特色である海洋からの漂着物への信仰の「外来性」と、外来の「日本神」の受容との関連性が検討された。台湾では海上や水上にある神像、王船、死体など特別なものを拾って神にする習慣がある。漂着物を、漂流神像、浮遊死体、漂流船、王船、漂流神木に分類して、現地調査の事例を報告する。ただし、漂流物が「日本神」となった事例は一般的な形態ではないという。「日本神」は台湾で死亡した日本人で、死後に鬼となって祟り、その後、鬼の意志を尋ねると、日本人の靈魂が祭祀を希望しているとわかり、神の同意と保証が認められた後に、祭祀対象となる。漂着物との比較を通じて、「日本神」が、「人を神に祀る風習」という特徴を持つことが確認できる。

補章は、「日本神」に関する各地の実態を映像記録に残そうとする動きを紹介している。新型コロナウイルス感染症の蔓延により、2020年から2022年までは十分な活動ができなかったが、2023年3月から再開しているとのことで、完成が待たれる。

本書は、台湾の民間信仰の動態的研究で、植民地統治下での出来事の記憶が、民間では鬼として一方的に貶められず、ねじれながらも神に昇華して祀られた現象を読み解く。本事例の「日本神」の在り方を列記すると、①1980年代以降に顕在化した現象で、台湾の政治状況の変化が背景にある。②植民地時代の記憶が、戦後約40年という時間を経て発酵し、新たな再解釈をもたらした。③軍人・警官・官吏など、植民地の権力機構の担い手を鬼から神へ転換して政治や軍事を馴化し「台湾化」した。④負のイメージとしての植民地化を、台湾の信仰と祭祀の文脈に落とし込んで、一部を正のイメージに転換した。⑤鬼から神への転換に当たって童乩の神託が大きな働きをした。現代でも台湾ではシャーマニズムは新たな装いで現れてくる文化装置として組み込まれている。⑥「日本神」は、台湾漢人の「鬼」「祟り」「御利益」のゆえに信仰対象となっている。⑦2011年の東日本大震災での台湾からの援助を契機に日本との交流が活発化し、様々な日本表象が台湾の廟に持ち込まれ日本式神輿が表象として定着した。⑧「日本神」を祀る廟への日本人観光客の誘致に成功し、新たな観光が創出にされた。しかし、廟を訪ねた日本人は郷愁を持ち込み、地元の信仰習慣を理解せず今後の行方は不透明である。⑨1990年代後半以降のインターネットの普及が情報検索を容易にして、過去の再構築や再解釈に大きな作用を及ぼすようになった。⑩台湾での異常死者への恐れを基盤にして、姿形を変えた有応公として「日本神」は台湾化されて定着した。⑪台湾の民間信仰の融通無碍な柔軟性が、「ねじれた記憶の創出」によって新たな表象を生み出した。⑫地域分布としては台湾西南部に多く、台南や高雄での戦前の日本人社会との交流の記憶が反映している。⑬悲惨な戦争の「場の記憶」が時代と共に読み変えられ、「美談」として昇華し、「出来事」として歴史化され、「日本神」に凝結

して表象化された。

「日本神」研究は、詳細なフィールドワークの成果である。植民地体験や戦争の悲惨で過酷な現実が、民間信仰というフィルターを通して、記憶の「ねじれ」を媒介として新たな意味が創出された。まさしく「現代人類学」である。「日本神」は、日本統治や戦争に関する集合的記憶の発現で、鬼が神になりうるという台湾の民間信仰の構造的理解を用いて日本人の靈魂を解釈すると、鬼一般に溶け込んで靈魂は日本人か否かは問わない。台湾の民間信仰の流動性や柔軟性が示される。台湾の民間信仰研究は、漢族の道教・仏教・法教・民間信仰、原住民など戦前からの長い研究史がある。ポストコロナ研究を踏まえた、人類学の「負の遺産」も明らかにされた。最近は「多文化」状況を踏まえて移民研究が活発化し、キリスト教やイスラーム教の受容と変容など新しい研究も進んできた。ただし、「日本」表象を変数にした民間信仰研究は、本書が初めてである。本研究は、「日本神」研究に留まらず、事実と伝承の狭間に注目して、複数の記憶の解釈がせめぎあう「真正性」をめぐる「闘争の場」の変容の研究でもあり、「日本神」に留まらない、今後の普遍的な研究課題を提示した。

課題としては、「日本神」の登場と社会・文化・政治・経済・情報の変化との照合で、1980年代、1990年代、2000年代、2010年代などの年代区分と対照させて考察すれば、「日本神」の流用の実態がより明確になったかもしれない。やや気になったのは、批判する人々の声が聞こえてこないことである。戦争のスティグマが「美談」によってかき消されることはないのか。植民地状況は本当に民間信仰によって飼い慣らされたのか。日本人観光客は高齢者ならば「日本神」に共感を持つとしても、一時的な現象のようにも思われる。

最終的には、台湾文化をどう捉えるかという問題があり、多様性を許容する文化なのか、台湾化の文脈に落とし込む強力な磁力作用があるのか、評価はこれからであろう。ポスト・コロナの中で沈静化した「哈日ブーム」の行方とも連動するかもしれない。いずれにしてもインターネットが新たな伝説を紡ぎ出す「ネットロア」は、「日本神」の拡大・縮小・消滅に関与することは確実で、今後の変容を追跡する継続研究に期待することは大きい。

(すずき まさたか 慶應義塾大学名誉教授)